

石の民俗資料館

13:40 石の民俗資料館 到着



学芸員の方に解説していただきながら、常設展・企画展を見学しました。

石の民俗資料館とは・・・

昭和 30 年代に機械化が進み、石工用具を失ってはいけないと、牟礼・庵治の石材加工業界の青年たちが昭和 55 年頃から資料収集・整理を始めました。そのなかの 791 点が国の重要有形民俗文化財に指定されました。常設展示の他、年間通して企画展、工作教室、コンサートなどを行っています。

天下の銘石・庵治石

高松市の北東部にある牟礼町・庵治町から産出される石。

①硬く②水や酸に強く③変色が少ない、というのが特徴です。

戦前は灯籠や狛犬、敷石などに使われていましたが、戦後に墓石としての需要が多くなりました。

採石場のジオラマ

大正末期から昭和初期にかけて見られた庵治石の採掘場(丁場)の風景を再現しています。

明治 30 年頃になって火薬が使われ出し、岩盤から切り離すのが中心となりました。

(岩盤に穴を掘っているジオラマ)

腰の高さでエンショウノミを持ち両側にゲンノウを持った人が立ち、交互にエンショウノミの頭を打ちます。穴が深くなるにしたがって、長いエンショウノミに変えていきます。エンショウノミは約 30cm～3m くらいのもので様々で 7、8 本のエンショウノミを使うこともあったそうです。

取る石の厚さ 9 割ほどの深さの穴を掘り終わると黒色火薬をしかけて発破します。

これらの作業は一人前の石工で 1 日 3 尺程度掘るのがやっとでした。

そのため大きな石を採るときなどは 3、4 日かかるときもありました。





真ん中のジオラマは、石にヤを打ち小割りにし、
注文に合わせて大体の大きさにカットしています。
カットした石は、木製運搬具のネコグルマ(一輪車)で運びます。

鍛冶

庵治石は硬いので鋼鉄の石工用具でも 30 分～1 時間もすれば先が丸くなって役に立たなくなります。そのため石工は朝 5 時頃には起きて鍛冶仕事をして、自分がその日に使う道具を鍛えました。自分の道具は自分で鍛えるため腕の良い石工は鍛冶仕事の腕も良かったということです。



運搬

(木製運搬具のフタツハマ(二輪車))

何人かで操作する運搬具で、分解することができます。急斜面を降ろすときは、オーライヅナと呼ばれる網を横棧にくくりつけて、片方を立木や杭に回しかけて「オーライ、オーライ」と声をかけながら降ろしました。

石引き

大きな石を水平方向や登り斜面に移動させる場合アイビ(敷板)を地面に敷いて凹凸をなくし、その上にコロ(丸太)を置き、コロの上に石を乗せたシュラを乗せる。そして石に綱をかけ、ロクロ(木製のウインチ)で引っ張ります。



加工場のジオラマ

大正末期～昭和初期にかけての庵治石の加工風景を再現したものです。石工はまず弟子入りすると鍛冶をし、それから徐々に加工技術を覚えていきます。一人前になるには4、5年はかかるといわれていました。

加工用具は丁場用具に比べて小さいものが多くなっています。

灯笼づくり

灯笼の火袋製作は加工作業の中でも高度な技術を要するもので、とりわけ透かしを打ち抜くことは最も緊張する一瞬です。

研磨

石工仕事には女性の携わる仕事はほとんどありませんが、研磨仕事の中のボウズリ掛けは女性の専門と言っても良い仕事でした。

①カナバンを使って荒削りします。

②ボウズリを使って石の表面を磨きます。

磨く時は砥石の上にオモリ代わりに石や磨耗したカナバンを乗せて綱で縛り、水を石の表面に流しながら使用しました。

石屋のくらし

石工の仕事用の格好は、上は屋号入りのハッピーで下はタンクズボンです。丁場の石工は朝5時頃から鍛冶仕事をして朝7時頃には家を出て丁場に上がります。普通はネコグルマを肩に担いで上がるので、そのときベントゴウリとハンバコをフロシキに包んで持ち手部分にぶら下げていました。

丁場の仕事は朝早くから夕日が沈み暗くなるころまで重労働が続いたので、昼1食では体力が続かず、2食食べる者もいたそうです。

庵治産地石製品は昭和60年度に香川県の伝統的工芸品に指定されています。

《企画展示室》

石とのコラボレーション企画「匠雲の仲間たち」



残念ながら雨でしたので見ることはできませんでしたが、芝生広場でも石彫作家による野外展覧会も開催されていました。



14:45 バス出発